

# イチゴ

甘みと酸味がほどよく調和したイチゴ。そのまま「パクツ」と口に運んで生食するほか、ケーキの彩りやジャムでもお馴染み。完熟したイチゴはビタミンCを豊富に含み、中サイズ10個で1日分の必要量を満たすともいわれる。

## 加温ハウスで促成栽培を確立

イチゴは、野菜類では珍しいバラ科の植物。北米東部や南米チリの野生種が祖先で、18世紀にヨーロッパに渡りオランダやイギリスで改良が進んだ。日本に伝わったのは江戸末期。栽培種がオランダか

ら持ち込まれ、それまでの野イチゴに対し「オランダイチゴ」の名が生まれた。

明治末期になると、福羽逸人博士が改良した福羽イチゴや久能山（静岡県）の石垣イチゴが登場した。もっとも、本格的な栽培が始まったのは戦後。昭和25年（1950）にアメリカからダナー種が入ってきてからのことだ。特に埼玉県は水田裏作物としてダナー種をいち早く導入。フレッシュな食味と首都に隣接している好条件もあって、埼玉ダナーが市場を席巻した時代があった。

イチゴを露地で自然のまま育てると、収穫できるのは5月中旬ごろ。元来、初夏に実る作物だが、今はクリスマスケーキを飾り、1月早々にイチゴ狩りシーズンを迎える。収穫期を何カ月も早めた要因には、加温タイプの農業ハウスの普及と促成栽培技術の確立がある。

イチゴは種を播いて栽培するのではない。親株から育った子株を苗として植え付ける。生育適温15〜25℃のイチゴは、6月ごろ親株がしきりにラ

ンナー（ほふく茎）を伸ばし子株をつくる。子株はまた次の子株をつくる。生産者は1本の親株から30株以上の子株を取り、苗床やポットに移植して養成。9月10日ごろハウス内に定植し、12月中旬ごろから収穫開始とすることが多い。

観光イチゴ園などでは、どの株も通路側に実を着けていて、摘み取りしやすい。必ず親株から来たランナーの反対側に花芽が出るので、それを見定めて植え付けてあるからだ。また、イチゴは一度に何本もの花芽を出すのではなく、1番花、2番花というように間隔をあけて花が咲く。ハウス栽培では4〜5番花のままで収穫して、5〜6月にシーズンを終える。収穫期間が半年にも及ぶのはイチゴの特性に沿った栽培をするからで、苗の植え付け時期をずらしているわけではない。

## 埼玉県の新品種がデビュー

最近食べたイチゴの品種は、何だろ？「とちおとめ」<sup>あきひめ</sup>「章姫」<sup>あきひめ</sup>、それとも「紅



ぶらさがって完熟！



イチゴの花



植え付け終了



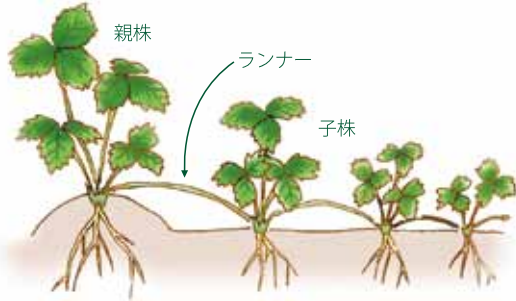
植え付け前の元気な苗



家庭菜園向けのポット苗



「つぎのおと」を市場や直売所に  
出荷する吉見町の清水輝夫さん  
(吉見町いちご出荷組合連絡協議  
会会長)。夫妻で約3ヶ月のハウス  
を3棟使って作付けている。



### ◆観光農園と市場出荷と

埼玉県のイチゴ産出額は全国10位(平成26年産)。県内全域で生産されているが、秩父市、川島町、吉見町、加須市、久喜市、越谷市などが特に盛ん。観光イチゴ園も秩父市をはじめ県内各地にある。

### ◆ミツバチが受粉を手助け

イチゴのハウスではミツバチが飛び、養蜂箱も見かける。これはミツバチに受粉を助けてもらうため。ハウスの中には媒介する昆虫が入り込みにくいし、第一、晩秋から冬に虫たちは飛ばない。受粉がうまくいかないと、イチゴは実が着かなかったり形の悪い実になってしまうので、生産者は養蜂業者に料金を払って借り受ける。家庭菜園で栽培するような場合、筆先や綿棒で受粉を補助してやると効果的。

### ◆食べているのは花托部分

イチゴは、ゴマのような種を含む表面の小さなふくらみ1粒1粒が果実。1個のイチゴには200粒ぐらいの果実が密に並ぶ。ただ、果実は表面にあるだけで、それを中から支えているのが花托という部分。イチゴは果実というより、大きくなった花托を食べる。

ほっぺ、「やよいひめ」、「あまおう」だろうか。イチゴは非常に品種変動の激しい作物で、各県の研究機関などが次々に新しい品種を育成してきた。消費者の好みは、甘くて酸味とのバランスがよいこと、大粒でジューシーなこと、色鮮やかで香りもよいこと。生産者側にとっては、

市場性が高いうえ、丈夫で多収性であることが望み。早生種か晩生種か、パックにしてもつづれにくいかななども品種選定の要件となる。

埼玉県は3月17日、県が育成したイチゴ2品種の愛称を発表した。「かおりん」と「あまりん」。名付け親は秩父市出身の落語家・林家たい平師匠だ。2つのイチゴは県農業技術研究センター(熊谷市)がおよそ8年かけて育種し、農水省に品



JAちちぶ・いちご部会は30軒中23軒が観光農園。写真は同部会長の田口賢司さんが営む「和銅農園」。70cmほどの高さにある高設土耕栽培で、通路は車椅子でも入れる十分な広さがある



花にやってきたミツバチと養蜂箱



種登録申請を行っているもの。「かおりん」の登録名は「埼園い1号」。「ふくあや香」と「ゆめのか」の交配で、きわだつ甘さと香りがあり、食感には張りがある。「あまりん」の登録名は「埼園い3号」。「やよいひめ」と「ふくはる香」の掛け合わせで、甘みと酸味のバランスがよくジューシーさがある。県オリジナルの両品種はすでに一部の観光農園で栽培を開始し、埼玉県農林公社種苗センターなどが親株の増産に努めている。広く普及していくことを期待したい。



左が「かおりん」、右が「あまりん」



県農業技術研究センターの説明会で生産者が新品種のハウスを見学